

## 方玉潤の詩經學

——『詩經原始』の特質——

### 方玉潤の生涯と著述

方玉潤の生涯と著述については「中國古典研究」第三十一號（昭和六一年十二月刊）の拙稿「方玉潤の生涯と著述」でその大要を記した。しかし論述の便宜上、本稿においてもまずそのあらましを示しておくたい。

方玉潤は字を友石、又は勳石、號を鴻濛子又は洪濛子と言った。雲南省廣南寶寧縣の人である。清の仁宗の嘉慶十六年（一八一七）に生れ、光緒九年（一八八三）八月、享年七十二歳で歿している。

咸豐五年、太平天國の騷亂に刺戟されて郷里の雲南を出で湖北省黃梅鎮の總兵王國才の軍營に投じた。年四十四の時のことである。王國才戰死ののちには湖北の按察使李孟群の下に赴き、李氏の自刎後は、曾國藩の幕府に入った。このころ曾國藩は兩江總督であった。曾氏の幕下で志を得なかつた方玉潤はついで北京に赴き同郷人で河北省大城縣の縣令であつた楊應枚の庇護を受けた。同治三年にこれまでの軍功により陝西省隴州長寧驛の州同の官を授けられた。しかし長寧驛の官署は太平軍に擄かれて機能していなかつたために、現實には隴州の官署に出仕して職務に當つた。在官十八年の後、ようやく擢んでられて

陝西省の甄坪廳通判に任じられたが、官に赴く前に病歿した。柩は嗣子の思慎が隴州に持ち歸つたが、貧窮のために葬儀を行うことができず、同郷人らの贖金によつてようやく隴州東郊の木塔寺に葬つたといふ。

生涯不遇の人であり志をとげることなく世を終つた。家も問もなく絶えている。

隴州にいたころ五峯書院なるものを復興し六年間主講の地位にあつたが、著述の大半はこの隴州時代のものである。統名を「鴻濛室叢書」とする三十六種又は四十三種の著書の内譯が傳えられているが、未完のものもあり刊本のあることの確認されるのはわずかに次の四種である。

『詩經原始』二十卷（同治十三年刊）

『鴻濛室文鈔』六卷（同治年間刊）

『鴻濛室詩鈔』二十卷（前集は咸豐十一年刊、後集は同治十三年刊）

『星烈日記彙要』四十二卷（同治十二年刊）

『鴻濛室墨刻』（光緒五年刊）

他の書名のみ傳えられる著述には『易經通致評解』『春秋通致評解』『四書通致評解』など經書類の評解、『運籌神機智略』『平賊廿四策』

村山吉廣

『中興論』など軍事・時事についてのもの、『評點杜詩』『評點聊齋志異』『評點紅樓夢傳奇』などの文學類がある。

著述から見ると、方玉潤はこのように經學・時務・文藝にと幅広い關心を持った人物と考えられる。向達氏所引（注②）（參照）の萬方照の『鴻濛室文鈔』序では方玉潤は「博大縱橫、備はらざるはなし。未だ中道に純なる能はずといへども、顧みて自ら往々特識を俱有す。要は古人の願下に向ひて氣を乞はざる者たり。先生それ文に弱たり」と記されている。師承にとらわれず、特識を重んじ、好んで獨自の見解を樹立しようとつとめたことが窺われる。

### 『詩經原始』の成立

自序は同治十年に書かれている。「凡例」の末の一段によると「是書持論つとめて己が見を抒す。前賢と小異せざるを得ず。未だ世の好みに乖くあるを免れず。なんぞあへて出して世に問ふや。然れども壘に菖蒲を嗜むは未だ始より人なくんばあらず。ここに於いて群相ひ懲慮し勸めて剗削に付せしむ。亦た以つて自ら主たる能はず。その役や辛未仲冬より經始して、癸酉孟夏に告竣す。凡そ月を閱すること一十有八」とあり、序の書かれた年の仲冬に上梓の工程が始まり、一年六ヶ月を要して翌々年の同治十三年（一八七三）の孟夏に刊行されるに至ったことが知られる。

刊行は「隴東分署」となっており、凡例の一段の後半には費を助けた人として張子衡、李勤伯ら十四名の氏名と參訂者として萬伯舒ら二名、校讐者として馬喜亭ら四名の名が擧げられている。官署のあった隴州の人々が多く刊行に協助していることが知られる。版心には「鴻濛室叢書三十六種之三」の文字が刻まれている。

一九一四年（民國三年）に趙藩らによって昆明で「雲南叢書」初編が刊行された時、この書は「經部之七」に收められた。のち、一九二四年に上海の泰東書局からはこの書の石印本が刊されている。この書が廣く世に知られるようになったのは、これによることが多い。一九六〇年には臺北の藝文印書館から雲南叢書の影印本が出版された。最新の刊本は一九八六年二月に北京の中華書局から出版された全二冊の標點本である。點校者は李先耕氏（點校説明）の日付は一九八二年秋である。氏によれば本書は中國科學院圖書館藏の隴東分署本を底本とし、これと雲南叢書本との對校を行っているとのことである。その結果、雲南叢書本には二百餘ヶ所の遺漏錯誤のあることが判明したという。ただこの書で注意すべきは原刻本にある圈點を全く省いていること、「眉評」を釋義の後に移しているなど、體裁上の變更を加えていることである。その理由として李氏は「考慮到對今人理解原詩意義不大、排印亦有不便、故均刪除」と述べている。印刷上の不便ということとは十分に理解できるが、圈點が原詩の理解にあまりかわりないとするのはどうであろうか。このことについては後述する。

『詩經原始』ははじめに自序がある。署名は「同治辛未（十年）年、小陽月朔日 古滇方玉潤勳石氏書」である。次に「卷首」兩篇があり、上は「凡例、詩無邪大極圖說、十五國輿地圖、大東總星之圖、七月流火之圖、楚邱定之方中圖、公劉相陰陽圖、幽公七月風化之圖、諸國世次圖、附作詩時世圖」から成り、下は「詩旨」であり、「虞書」「禮記」「論語」などの諸書に見える詩論と、黃櫨・歐陽修・鄭樵・朱子以下、清の姚際恆に至る十四氏の詩説とを擧げ、一々、「案語」を附している。卷一から卷末の第十八に至るまでは「周南」から「商頌」までの三百六篇の評釋である。

一篇の詩には題下にまず「詩旨」を簡潔に示す一文がつけられている。詩の本文には「圈點」「批點」が施され、詩句には評語が加えられる。欄上にも評語がある。これがいわゆる「眉評」である。評釋は本文より一字下げ、小序・集傳をはじめ前人の詩解に對する批判を載せ、ついで自説を記す。この後に「集釋」があり、語釋を集めている。次に「標韻」があり一篇の詩韻について韻字を標出してゐる。

『續修四庫全書提要』經部には『詩經原始』十八卷（二十卷という時は「卷首」の兩篇を加えている）を著録してゐる。これは雲南叢書本である。江翰の撰語には次のように言ひ。

この書ただに議論の多く姚際恆を宗とするのみならず、その旁批圈點も亦た詩經通論に効ひて之を爲す。然れども開卷に首列せる詩無邪・太極圖は則ち固より姚の未だ有らざる所なり。而して凡例中にまさしに謂ふ、姚氏それ傳を排するや序を排するよりも甚しく、所論も又た未だ能く盡く古と合せず、と。故に自序に謂ふ、それ以つて育に鍼し廢を起すに足らず、因りて原始一書を作りて詩人の始意を原ねんとす、と。序傳を舍却して直に作詩の本旨を探り以つてその眞を得んとするは志誠に大なり、豈に言ひ易からんや。（以下略）本書が姚際恆の『詩經通論』の所説を繼承しその克服を目指したものであることは江氏所引の自序の文からも明らかである。「原始」の書名が「詩人の始意を原（たず）ねる」ものであることも言うまでもない。江氏も「志誠に大なり、豈に言ひ易からんや」と述べてゐる。果してこの書はどのような評價に堪えるものであらうか。江氏も個々の詩解については「固より左證なし」「みな序の範圍を出でず」などときわめて批判的である。次に順を追つてその詩解の特質を記述する。

### 方玉潤詩解の特質

詩經の編纂については「孔子刪定説」を採らない。この意味で『史記』およびこれを承けた朱子の『詩集傳』の説に反對する。また姚際恆が詩經を「大聖人の手定するところ」としてゐるのとも異なる。方玉潤は孔子は「樂を正している」が、刪詩はしていないとする。後人は「正樂」の二字を刪詩と曲解してゐるのだという（詩旨所收の説）。また孔子は「詩三百」と明言してゐるが、三千の詩を刪つたとは言っていないとする。そうして詩經はおそらく「陳靈の世、孔子を去ること五六十年」に「高名盛徳の士」によつて集められて朝廷に獻じられたものであらうと考へてゐる（同上）。これは宋の葉適や清の朱彝尊、崔述らに近い説である。

詩序については「秦火すでに烈して偽序はじめて出で、名を子夏に託し、又た孔子と曰ふ」（自序）とあり、これを偽序と呼んでゐる。凡例では「大小序は皆衛宏の託するところ、未だ據りて以つて信となすべからず」と言つてゐる。これは宋の葉夢得、清の姚際恆や崔述らの説と同じである。彼らはいずれも『後漢書』儒林傳の記述をよりどころとしてゐる。

朱子の『詩集傳』については「序を駁すといへども、朱も亦た未だ序の範圍を出づる能はず」といい、ついで「ただ鄭聲淫なりの一語を誤讀して、遂に鄭詩はみな淫なりと謂ひ盡くこれを反し、大いにその説を肆いままにし、以つて葩經を玷すときは、則ちその失又た序の偽託附會して當るなきより甚しきものあり」と論じてゐる。これは姚際恆の説をそのまま繼承したものである。つまり詩序と集傳とをともに斥ける立場である。

正變論については卷一國風第一のはじめに次のように言う。

二南は固より風の正なり。十三國中にも亦た未だ嘗って正風なくんばあらず。けだし正變は體を以て異なり、國を以て異ならず、聲を以て異なり、時を以て異ならず。しかれども體もまた國を以て異なるあり、聲もまた時を以て異なるものあり。ここに在りてか、善く詩を讀む者は、反覆涵泳しておのづから心に得ることあり。

つまり方玉潤は正風・變風という概念は認めるけれども、それは時代と國とによるものではなく、個々の詩の體と聲とに依るのだとするものである。姚際恆は「詩に正變なし」と明言してそれ以上は言わないし、崔述は「詩を論ずるにはただその詩のみをおもひ、その正と變とおもはず」という。方玉潤の立場はほぼこれと同じであるが、個々の詩に關しては正變を認めているところが異なる。「卷首」上には著述の一つである『太極元樞』から録出した「詩無邪太極圖」なるものを載せているし、『傳說彙纂』から録出した「作詩時世圖」を収めているが、そこには正變の別が残されたままである。ついでに記しておくくと方玉潤は「二南」の「南」を「周以南の地」の意となし、この地は親しく文王の風化を被って「中正和平の音」が多いので、正風となし、聖人がこれを取って房中の樂としたのだとしている。これは姚際恆や崔述が「南」を地名にかかわるものだとした點では同一であるが、兩者が二南の詩にも衰世の詩があるとしているのに對し、これを認めないとする點で異なる。

賦比興三體の設定については、これはよりどころがなく「小兒の語を學ぶに、句句強いて分解をなすに同じきがごとし」(凡例)だと言っている。その説の要は次のようである。

#### 方玉潤の詩經學

それ作詩には必ず興會あり。或は物に因りて以て起興し或は時に因りて感興するは皆な興なり。その中に明言する能はざるものあれば、則ち物を借りて以て之に喩へざるを得ず、所謂比なり。或は二句比、或は通章比なるもの、みな相題及び文勢これを爲すも、亦たその所に行ひて行はざるを得ざるのみ。判然たる三體、以て分晰して之を言ふべきに非ず。學者古詩を知らず、ただ漢魏の諸作を觀れば、その法おのづから見はれん。故に編中「興、比也」の類、おおもね刪除を行ふ。ただ旁批において、ほぼ點明をなし、用意の在る所を知らしむるのみ。賦體に至りては章を逐ふて皆な是なり。おのづから頌贊なし。(凡例)

「賦比興非判然三體也」の語は明の郝敬の『毛詩原解』の序にあり、この説はこれに近い。これに對して姚際恆は興を「興」と「興而比」、比を「比」と「比而興」の二體ありとするのみで三體説の折衷を試みているに過ぎず、方玉潤ほどの明確な立場にはない。要するに方玉潤は詩それぞれの表現に即して詩意を探求すべきだとしたものである。方玉潤のこの説に對してはすでに古く橋本循氏が「方玉潤の如きは賦比興の論をなすを好まず、三體を分晰することはできぬという純粹な鑑賞風の一派もあつて、われらのすこぶる共鳴する所である」(『支那學』四・昭和四年六月刊)と贊意を表している。

#### 方玉潤詩解の特質(二)

詩解に當つて方玉潤がもっとも重視したのは「言外の意」である。「凡例」では次のように言っている。

六經中、ただ詩のみ讀み易く、亦たただ詩のみ説き難し。もとよりその趣なく序なきに因り、亦た詞旨の隱約なるに由る。つねに言

外の意多く、他書に比して明白顯易ならざるなり。又た況んや説詩の諸儒、考據に非ざれば即ち講學の兩家なるをや。而も兩家の性情は詩と絶えて相近からず。故に往往穿鑿附會し、膠柱鼓瑟す。之を固に失はざれば即ち之を妄に失ふ。又たいづくんぞよくその詩人言外の意を得るを望まんや。

詩經の詩句のもつ意味は「隱約」であり、説詩者によつて多義的に解釋される。考據家は考據家風に講學家は講學家風に穿鑿し附會する結果となりかねない。したがつて「言外の意」をどのようにとるかが大事となる。すなわち彼は「詩には言外の意多し。心に會する者、此に即きて彼を悟ることあらば、以つて貫通すべからざるなし」(詩旨)と言つと同時に「詩を説くには、まさに觸處旁通すべく句下に泥むべからず。詩を解するには必ず文に循ひ意に會して乃ちその環中を得べし」(同上)とも言つてゐる。

「言外の意」はすなわち「詩人の本意」である。しかしこれは兩刃の劍であつて「附會的解釋」を引き出して來た元凶でもある。そこでこの「言外の意」「詩人の本意」を正しく引き出すために「通章の大意」を得ることに努めねばならないとし、そのためには經文を注文のために切り離すのを止め、全文を一體として「涵泳」せよと説いた。「凡例」ではそれについて次のように記している。

詩を讀むには、まさに全文を涵泳すべし。その通章の大意を得ざれば、乃ち上りて古人の義旨の在る所を窺ふべし。未だ篇法明らかならずして能くその要領を得る者あらず。いまの經文は多く章を分ち句を離して相聯屬せず。明者に在りては固より會して貫通すべきも、初學に在りては、はなはだ綴りて韻を成し難し。之を解する者も又た往往字句の間に泥みて、以つて全詩の首尾をして相貫く能は

ざるを致す。

このため、さきにも記したように「詩經原始」では各詩はすべてまず本文を全體としてかかげ、次に本文より一段下げて釋義が附されるという形式となつてゐる。ただ章のおわりには「一章」「二章」等の文字が注記されるが、これは方玉潤によれば、「漢の樂府の『一解』『二解』の例の如く、以つて段落を清くす」るためのものである。彼はこの方法を自讀して次のように言う。

こひねがはくは、學者をして以つて一氣に讀下し先づ全篇の局勢を覽、次いで筆陣の開闔變化を觀、後、乃ち細かに字句研練の法を求め、因りて古人作詩の主旨を精探し、則ち讀者の心思と作者の心思とをしておのづから能く默會貫通し、言を煩はせずしておのづから解せしめんのみ。(同上)

「字句研練の法」を求めようとするのはいわゆる「運筆の妙」を知らんがためである。このことは同時に次の詩の本文に「圈評」を加えることとも關連してゐる。彼は言う。

古經何ぞ圈評を待たんや。月峯、竟陵久しくすでに譏を世に貽せり。しかれども奇文の欣賞を共にするは書生の結習、固より免れがたきところ、即ち古人の精神も亦た此を借るに非んば出すこと能はざるなり。故に心力を竭盡するを惜まず、悉く標出を爲す。既に眉評を加へ、復た旁批を着く。更に圈點を用ひて以つて眉目を清くす。豈に觀を飾らんか。亦た用ひて以つて讀者の精神を振ひ、古人の精神と合して一ならしめんのみ。(同上)

詩經の本文と注文とを分離したり、詩句に「圈評」を施したりすることは、すでに述べたごとく姚際恆の『詩經通論』で試みられてゐることであるが、同じ方式を採用しても、方玉潤の場合はその理論づけ

のための説明がより積極的であり「全文を涵泳する」ことの意義がよりはっきりと示されている。

次に彼が釋詩に當つて導入したのは詩經の詩を「民間歌謠」の觀點から檢分することであつた。その端的な例が周南の「采芣苢」篇での所説である。彼はこの詩の主題について次のように言う。

讀者、試みに平心靜氣この詩を涵泳せよ。恍として田家の婦女三五五平原繡野に於いて風和日麗の中、群歌互答し、餘音最長として遠きがごとく近きがごとく、忽ち斷え忽ち續くを聽き、その情の何を以つてか移り、神の何を以つてか曠がるやを知らず。則ち此の詩は必ずしも細かに釋ねずしておのづからその妙を得べし。唐人の竹枝、柳枝、櫛歌等の詞おむね方言を以つて韻語に入り、おのづからそのいよいよ俗にしていよいよ雅、いよいよ故實なくしていよいよ以つて咏歌すべきを覺ゆ。即ち漢の樂府江南曲一首の魚戲蓮葉數語は初め之を讀まば亦た毫も意義なし。しかれどもその千古の絶唱たるを害せず。情の眞、景の眞の故なり。此を知らば則ちともに詩の旨を論ずべし。

ここでは彼はすでに「經典の注釋者」の立場を離れて一個の文學鑑賞者の位置に立っている。結論は次のようである。

けだし、この詩は即ち當時の「竹枝詞」なり。詩人みづからその國の風俗を咏することかくのごとし。或は此を作りて以つて婦女輩に與へおのづから之を歌ひて互いに相ひ娛樂せしむるやも亦た未だ知るべからず。いまの世、南方の婦女山に登り茶を採り結伴して謳歌するは、猶ほこの遺風ありといはんか。

周南の「漢廣」篇の釋義に當つても次のように言う。

この詩は即ち「刈楚」「刈蕩」のためにして作らる。いはゆる「樵

唱」これなり。近世の楚、粵、滇、黔の間、樵子山に入れば多く山謳を唱ひ響林谷に應ず。けだし勞者は善く歌ひて勞を忘るる所以のみ。その詞大抵男女相ひ贈答し、私心愛慕の情にして淫に近き者もあり、亦た禮を以つて自ら持する者もあり。文は雅俗の間にあり、而して音節は則ち自然の天籁なり。その佳處に當りては往往神に入り學士大夫も及ぶ能はざるところのものあり。愚意ふにこの詩は亦た必ず當時の詩人歌ひて以つて樵に付せしならん。

「漢廣」の題下に記した詩旨では「江干の樵唱なり。徳化の廣被を驗するなり」とあるが、歴代の注釋家がひたすら「文王之化」に力點を置いて説をなしているのに對し、あえて邊地の樵歌との類似を比較したところに大きな意義がある。これは「采芣苢」の詩の場合と同じく「字句の末」に拘泥せず全詩の「情趣」がいかなるところにあるかを平心に求めた結果であると言える。こうした見地から方玉潤には詩經の詩と後世の詩文とのかわりを大膽に指摘している場合が少くない。陳風「月出」篇では次のように記している。

この詩は男女の詞なりといへども、一種の幽思牢愁の意、固く結ばれて解くることなきあり。情念深しといへども心淫蕩なるにあらず。且つ男意の虚想より活として一月下の美人を現出す。みな實に遇ふところあるにあらず。けだし巫山・洛水の濫觴なり。料らざりき、諸儒認めて以つて眞となす。あに詩人の晒ふ所となさざらんや。(中略)その用字の聲牙、句々韻を用ふるに至りては、すでに晉唐の幽峭の一派を開く。

周南「卷耳」篇の第二・第三・第四章の「眉評」では次のように言う。

下の三章は皆な對面より著筆し、その勞苦の狀を歷想し、強ひて

自ら寛にしていよいよ寛なる能はず。未だ乃ち意を極めて模寫せずして急管繁絃の意あり。後世杜甫の「今夜鄜州の月」一首は、此より脱胎す。

周南「兔置」篇の「眉評」でも次のように記す。

干城、好仇、腹心は即ち上の肅肅の字より看出す。落落たる數語、「上林」「羽獵」「長楊」の諸賦を駭ふべし。

王風「黍離」篇の「眉評」には次のようにある。

三章は只だ六字を換へしのみ。而れども一たび往きて情深く、低徊すること限りなし。これ専ら虚神を描摹し、憑弔を擅長するを以つて詩中の絶唱たり。唐人の劉滄、許渾の懷古諸詩は往迹その音調を襲ふ。

もちろんこうした指摘には姚際恆に先例がある。例えば鄘風「君子偕老」篇について、『詩經通論』でもこの詩を宋玉の「神女賦」や曹植の「感甄賦」の濫觴だとしているのがそれである。しかし方玉潤はこれを更にひろげ事例をより豊富にしている。たとえば邶風「擊鼓」篇第四章の「眉評」で、

文筆はじめて曲なり。陳琳の「飲馬長城窟行」と機局相似たり。

といい、王風「兔置」篇の「眉評」で、

詞意悽愴、聲情激越なり。阮步兵もつばらこの種を學ぶ。

といい、陳風「渭陽」篇の「眉評」で、

詩格老當なり。情致纏綿として後世送別の祖たり。

といっているなどがそれである。

### 解釋學史上の位置

方玉潤の『詩經原始』が姚際恆の『詩經通論』の延長線上にあるこ

とはいまさら言うまでもない。姚際恆の立場はいわゆる「反朱反鄭」であり、朱子の『詩集傳』を批判するとともに『毛傳』や『鄭箋』にも反対した。姚際恆には清初の反朱子學の氣分が濃厚に反映しており、古注に對するよりも、新注に對する論難に一層のきびしさがある。とくに朱子の「鄭衛淫詩論」の立場には眞向から對立し、朱子が「淫奔の詩」としたものはことごとく斥けている。方玉潤はこの點でも忠實に姚際恆の説を守っており、鄭風「將仲子」篇ではこの詩を「世の禮を以つて自ら持するを諷するなり」といい、「狡童」篇でもこの詩を「君の群小の弄する所となるを憂ふるなり」といい、「風雨」でもこれを懷友の詩であるとしている。衛風でも「木瓜」篇を朱子が「疑ふらくは亦た男女相贈答するの辭か」としたのについて次のような反對論を述べている。

集傳は詩詞においてやや男女の字に涉れば、即ち以つて淫奔の詩となす。説詩かくのごとくなれば、未だ忠厚を傷つくるあるを免れず。恐らくは詩人の意にあらざらん。それ詩中固より淫奔なるものあり。しかれどもその然る所以を實見するにあらざれば、おおむね指して淫奔となすべからず。この詩のごときは絶えて男女の字なし。而るに何ぞ必ず指してそれ靜女の類となさんや。小序は僞なりといへども、必ず傳ふる所あり。以つて「齊の桓公を美す」となすも、ことごとく因なきにあらず。けだし病は「美」の字に在るのみ。この詩は齊桓を美するにあらず。乃ち衛人の以つて齊桓に報ゆるを諷するなり。

ここでは方玉潤は結論としては詩序の説に立戻っている。これは姚際恆がこの詩を「男女の贈答の辭」とする朱子の説に反對して、「朋友相贈答するとなすもなんぞ不可ならんや。何ぞ必ずしも男女なら

ん」としているのともいささか異なる。

このように方玉潤は一方において姚際恆の「反淫詩」の立場を繼承するとともに、更に一層強くこれを推しすすめている點さえある。これは方玉潤の見識のなかにひそむ「固陋さ」のあらわれであろう。このため近人何定生氏がその「清儒對於詩經の見解」の方玉潤の項で「思想最難の方玉潤」と題して次のよう批判をしている。

從毛鄭、朱傳、到詩經通論、方氏都把他們的思想揉合到他的詩說裏去、却不必問其客觀關係、所以他的解釋也最支離破碎、剛好和崔述讀風偶識的歷史客觀精神相反。就以二南爲例吧。方氏一面接受了毛鄭的文王之化的思想、同時也採用了朱子的民謠見解、再加上姚氏用比喻說詩的方法。

梁啓超も方玉潤が詩旨を論ずるに當って「獨到の處」があるとしながらも、その學風には好意を示さず、「詩經原始はやや帖括の氣を帶ぶ。訓詁名物の方面は、ことに疏舛多し」(『中國學者近百年學術史』十四)と述べている。

冒頭に略述した經歷からも知られるように方玉潤は邊地に成長し確たる師承もなく軍歴・官歴もつたなく不遇のうちに生涯を終った人であり、批判精神は旺盛であつても、それを裏付ける學識に乏しかったことは否定できない。彼にとつて姚際恆の『詩經通論』はその批判精神が共鳴することのできた唯一の書であつたけれども、これを十分に發展させることができなかったと評される所以である。

ただその特質とするところはひたすら「詩人の本意」を探求することに努め、「全文を涵泳」することに力を注いだことである。その結果、詩經の詩句と漢魏の樂府や唐宋の詩詞との關係を指摘したり、さらには當時行われていた地方の民謡との類同を示唆したりするなど、

詩經解釋に新しい方向を見出す機縁を作り出すこととなつた。また「運筆の妙」など詩經の詩句の修辭法への着目にはいちじるしいものがあり、この點でのちの詩經研究に資することとなつたものが認められる。ことにその「眉評」には出色のものが多くあり、これは今後この書の評價上重要な項目として取り上げられるべきものと思われる。

『評點杜詩』『評點聊齋志異』『評點紅樓夢傳奇』などの文學類の著述のあることはすでに記したが、これらのことから知られるように、方玉潤は文學への志向を多分に持ち、「詩經原始」においても、「圈評」、ことに「眉評」はもつとも得意で、もつとも自由にその本領が發揮できたところであつたであろう。「圈評」の傳統は宋明以來の文藝批評の方法の發展に負うところ大であるが、これを詩經の詩句の解釋に大膽に導入し一定の成果を擧げていることは、民國以後の詩經研究の先驅をなすものとして評價されるべきである。いわゆる疑古派の人々、とくに顧頡剛がこの書の内容に關心を寄せるに至つたのも當然のことであろう。なお、最新の研究論文の一つに李先耕氏の「談方玉潤的《詩經》研究」(『求是學刊』(黑龍江大學)一九八七年一月刊)のあることを記しておく。

法(一) 傳記資料には次のようなものがある。「方玉潤傳」(方驥仙編『滇南碑傳集』卷二十五、民國二十八年 開明書店刊)所收。「敎授承德郎甄坪廳通判方君墓志銘」(同上)。「續陝西通志稿名宦傳」(同上)

(2) 方玉潤の著述については向達「方玉潤著述考」(文學季刊創刊號一九三四年一月所收)のちに向達著『唐代長安與西域文明』(北京一九五七年四月三聯書店刊)に收録)がある。また「文史」第九輯(一九八〇年六月刊)には黃美椿の「《鴻蒙家書》與方玉潤著作」があり向氏の缺を補っている。



- (3) 姚際恆の『詩經通論』については拙稿「姚際恆の學問」——『詩經通論』について——（『漢文學研究』9）（昭和三十六年九月刊）、「姚際恆論」（『目加田誠博士古稀記念中國文學論集』）（昭和四十九年十月刊）、「古今偽書考」補説（『東洋の思想と宗教』第三號）（昭和六一年六月刊）等を参看して頂ければ幸いである。
- (4) 『詩經通論』『詩經論旨』の「乃紊亂大聖人所手定」の句、これは明の何楷の『詩經世本古義』への批判。またここでは『子貢詩傳』や『申培詩說』についても「聖經を紊亂した」と論断しており、姚氏は詩經を孔子手定の聖經と考えていた。
- (5) 歴代の賦比興論についての紹介と批判は趙制陽の『詩經賦比興綜論』にくわしい。趙氏は『詩經名著評介』「方玉潤詩經原始評介」（臺灣、學生書局、民國七十二年十月刊）の中で方玉潤の三體不可分説の意義を認めている。
- (6) 姚際恆は説詩家の弊害を論じて「漢人は之を固に失ひ、宋人は之を妄に失ひ、明人は之を鑿に失ふ」（『詩經論旨』）と述べている。方玉潤のこの段の主張はこれを承けたものであろう。
- (7) 詩經の本文に「圈評」を加えた最初は明の鍾惺の『詩經鍾評』であり、姚際恆はそれを繼承したものである。兩者のかかわりについては拙稿「鍾伯敬『詩經鍾評』の周邊」（『詩經研究』第六號）（一九八一年六月刊）を参看せられたい。
- (8) 趙制陽氏の「方玉潤詩經原始評介」（前出）はこのことについて、すでに「方氏所舉、以爲詩經中若干特殊作法、影響後世詩派與名家之作、藉知古今詩文、一脈相傳、源流有自。這從文學發展史的觀點來看、的確是有其意義的」と述べている。
- (9) 『詩經研究論集』（林慶彰編・民國七二年、臺北・學生書局刊）所收。